

# 一人ひとり、一枚いちまいの、年賀状

鳥山 柚樹

これで六枚目になるのだ。遠くに残した妻の家へ往復して、今年も看守の事務机にしまいこまれるハガキは。

一年に一回、たった一枚しか書けないのは、俺の塀の中での稼ぎが少ないからじゃない。俺がまだ生きて償いをしていくことを伝えるのに、ただ一人の名前しか俺には分からないからだ。

格子の窓の外の立木は、もう何度、夏の日差しを享けて葉の隅々まで命をめぐらし、もう何度、冬には命を散らしてきたのだろう。

文字を書くなんて柄じゃない、得体の知れない皺の入った黒焦げた顔は、寒い独房のせいではない。六年過ごせば、自分の踏み違えた場所が分かった。そして、この道を辿り続けても格子の外にはもう未来は無い事を悟った。

がちごちになった不器用な手で下手くそな字を綴って、

「看守さん、今年も宜しくな」

償い、などとは聞こえが良い。言い訳、という言葉が似合っているかもしれぬ。カレンダーを見ればまだ、二十四日だ。一年に一回の言い訳、今年はずっと届くはずだ。

雪国の新年は少し早くやって来る。霜月になって、枯れ落ちる木の葉に追い討ちをかけるように温い長雨が降ったかと思うと、空は薄暗く低くなり、暗い夜を過ぎると落ち葉に埋もれた大地は一面、銀白色に変わる。

師走に入り、日増しに降り積もってゆく雪に、北国の村人は家の戸を閉ざされ、窓の外の音は深く沈み、ひとりごつ言葉にも雪の日の静けさが染みついていることに気付かされる。

静かに降りしきる晦日、囲炉裏の火に目を凝らし、炭がはじけて冷たい空気に触れて消えてゆく短い生命に耳を澄ませていると、遠く行きつけなくなった玄関の方からかすかに音がする。雪の降るのとは違う、ザックザックと雪を壊してくる音、次第にその音は大きくなる。

寒さに閉ざされた村人には、この音に鋭い直感を見出せるはずだ。

しかし村人は、依然として炭火の生命の始終を見つめている。

ややあって、軒先のポストに庇から雪が落ちる鈍い音がした。そして、またザックザックと音を立て、その音は遠ざかってゆく。

ああ、今年もやって来るのだ、新年が。辺りが静寂になると、ついひとりごちてしまった。同時に、自分の心が一日先の喜びを静かに感じていることを気付かずにはいられなかった。

一日早く届く年賀状。雪国の新年は少し早くやって来る。

**消**印のない年賀状は、私からの便りだと思って下さい。一回り昔の寅年の年賀状、切手が足らなかったから、懐かしいあなたの家のポストに入れました。

ああ、あれから十二年も経つのですね。でも、私には空の色も暮れの街のにぎわいも、私がまだいた時と変わらないように思いました。私の生きていた頃と、あなたの住まいも変わっていなかったと思うのは、私の希望的観測でしょうか。でも、嬉しかったです。

この街に久しぶりに降り立ったとき、あなたを一目見たいと思っていたのです。でも、あなたの家の前まで来たとき、やっぱり私の時計は似ているようで違う時間を刻んでいると思ったのです。だから、年賀状を一枚だけ、この街に残しておくのです。

返事は残念ながら受け取ることができません。私のインクは年を越す前に消えてしまうでしょう。時間に色あせた古い年賀状があったら私だと思って下さい。